

困にとらえられています。

MIC 値を不等号なしで決定づけるには、薄い濃度から濃い濃度までたくさんの段階の濃度で検査を試さなければなりません。すると検査できる薬剤の数が限られてしまいます。「感受性か」「耐性か」が決められる濃度の範囲に絞って検査することで、薬剤の種類を増やしました。またそのため MIC 値が不等号で示されることになりました。

薬剤感受性検査の結果は、菌と薬剤という2つの因子でのみ「有効」「無効」を判定しているものです。抗生剤選択にあたっては、病巣の部位、他の感染症を伴っていないか、副作用、基礎疾患、臓器移行性、殺菌特性など患者情報、薬剤情報が考え合わされ決められていきます。

(文責：細菌室)

H I V検査について

平成24年10月からH I V抗体検査の試薬が新しくなりました。そこで、H I V検査について詳しくご説明したいと思います。

<H I Vとは>

Human Immunodeficiency Virus (ヒト免疫不全ウイルス) のことで、ヒトの体を様々な細菌、カビやウイルスなどの病原体から守るのにも重要な細胞である、ヘルパーT細胞 (CD 4陽性リンパ球) や一部のマクロファージなどに感染するウイルスです。H I Vは抗原性、および遺伝子構造の違いからタイプ1 (H I V-1) とタイプ2 (H I V-2) の2型に大別されます。

<H I V検査の種類>

A I D S (後天性免疫不全症候群) の原因ウイルスであるH I Vに感染しているかどうかを調べる検査です。H I Vに感染すると、まず体内でH I Vが増え、その後H I Vに対する抗体が産生されます。通常のH I V検査は、血液の中にH I Vに対する抗体があるかどうかを調べる「抗体検査」が一般的です。また、より早い時期からの感染を見つけるために、H I Vが増殖し始めた時点でウイルス遺伝子を調べる「核酸増幅検査」やH I Vを形作るタンパク質を調べる「抗原検査」、抗体と抗原が同時に測定できる「抗原抗体同時検査」があります。

<H I V検査の流れ>

最初に「スクリーニング検査」を行い、そこで陰性であれば「H I V検査陰性」となります。陽性になった場合には引き続き「確認検査」を実施し、確認検査が陽性であれば「H I V感染」、陰性であれば「H I V検査陰性 (スクリーニング検査の偽陽性)」となります。スクリーニング検査の陽性には、H I V感染による「真の陽性」と、H I Vに感染していないにも関わらず、非特異反応により陽性となる「偽陽性」も含まれています。そのため、確認検査は必ず行う必要があります。

以前使用していた旧試薬は抗体検査のみでしたが、新試薬では抗原抗体の同時測定が可能になったため、早期検出感度が向上しました。これからもH I V感染の早期発見に役立てていきたいと思います。

(分析：免疫検査)

スクリーニング検査： HIVに感染している可能性があるかないかをふるい分ける検査

確認検査： スクリーニング検査で陽性となった時、その反応が本当にHIVによるものかを確認するための検査

